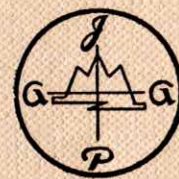
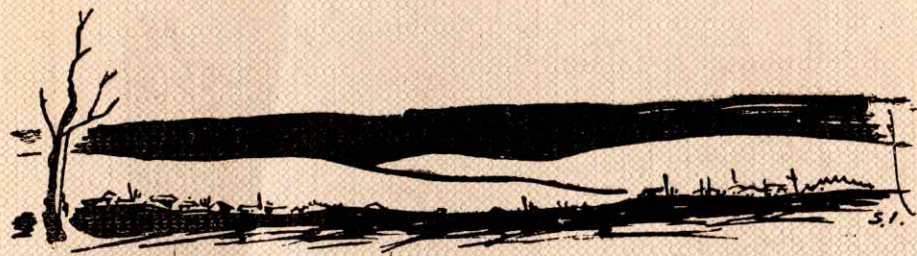


会報





目次

山の写真・カメラ……………風見武秀(2)

山岳映画について……………小井菊雄(3)

初夏の私の好きな撮影地……………小合正勝(7)

一随……………想一私のベビーパール……………月原俊二(4)

◇◇◇昭和三十一年度協会写真展覧会……………(6)

◇◇◇昭和三十一年度協会映画会計画……………(6)

◇◇◇スポーツ芸術展覧会要項抜萃……………(6)

最近の感光材料……………古谷正次郎(8)

行事報告……………(10)

展覧会報告……………沖田虎吉記(10)

映画会報告……………(11)

撮影合宿報告……………蔵王合宿……………中野慶一記(11)

立山撮影行……………沖田虎吉記(11)

八甲田合宿……………風見武秀記(12)

委員会報告……………沖田虎吉記(10)

月例集会報告……………沖田虎吉記(13)

====消息====……………(6)

編集後記……………(16)

出で湯のあちこち……………小合正勝(15)

巻頭言

塚本 閣 治

懸案の会報が出る事になったのは先づ何より御同慶に堪えない。この会報を通じて会員間の理解や研究が深められて行く事は疑いない。



槍ヶ岳登山者の八割迄がカメラを携えていると云うこの時代に山岳写真専門の研究団体の一つや二つあるのは当り前過ぎる事である。所がそのカメラを持つて山に登る事は非が云々されたのは僅か二昔前の事であつた。その頃日本の登山界は所謂アルピニズムが旺んに論議され、登山行為の純粋性の上から黒田正夫君など山へカメラなど持つて行つて山を本当に味合えるかと喰つてかかつて来たものだ。そう云う黒田君も今では考え方も變つたらうし今更昔話しを蒸し返えそうと云うのではない。カメラを通じて山を見る事の大切さを云いたただけである。

「獲物を追う狐師山を見ず」と云うがカメラを持つて山に立ち向う者は山を見ない所ではない。レンズの目を通して自然の一角を截り取らうと云う真剣さは歩いている時も休

んでいる時も絶えず山の姿や雲の動き、一木一草の佇いにも心を配る。どんなに登る登山者の中でカメラする者だけが度々背後を顧る。

映画の撮影となると、行かないうちから目的地が判り切る程事前研究を積む。初めて行つた所でも曾遊の地であるかのような錯覚を起す位にやつて、どうやら氣を吞まれる事なしに必要な場面を見落さないで来る。

一度カメラを持たないでのもんびりと山歩きをして見ようかと思ひ乍ら扱てとなると矢張り丸腰では物足りない。吾々に取つては山とカメラは最早や切り離す事は出来ない存在らしい。

日本山岳写真協会が誕生してから未だそう長く経つた訳でもなく、会員獲得に特別力を入れたと云うのでもない。それでい乍ら会員も殖え会報の必要も生じた。同じ趣味に徹しようとする人々のこの会が健全に成長して行く事を祈り度い。



山の写真、カメラ

風見武秀

山が好きで良く歩いた。そのうちにカメラを持ち出して、病い膏もう、だんだん写真を撮る方が主になって来て近頃は、天候が悪くなつて撮影不能と決まれば、山の頂きは踏まないでも、さっさと引揚げる。

良い条件の被写体でチャンスに恵まれば夜明け前から、食事を抜いて、頑張るフアイトはまだまだ盛んである。

最近山の写真を撮る為の、カメラの組合せを色々考えている。

カメラ一台では何と云つても心細く近頃の様に、カラーフィルム、赤外フィルム、高感度フィルム等、使用フィルムの種類が、こう多くなつて来ると、益々その感が強い。

最近の山行には、カメラ3台は持つて行くことにしている。

35ミリカメラは、カラー専用、ローライ型カメラは、尤も数多くシャッターを切るの

で、何時も手元から離せない。一眼レフ、フレックスコレは、レンズ交換が出来るので十数年来愛用している。このカメラには、望遠レンズを二本程持つて行く。

ローライ型カメラとの組合せでは、このレフコレは、常時望遠レンズをつけて使用する事が多い。

一〇五ミリ付の2B全判カメラは、スピガラ、クラウン、リンホフ等の名刺サイズで、レンズ交換をしないで、標準レンズのみで撮影する場合には、軽量で操作が簡単な、この種2Bカメラは有効である。

山の撮影で、レンズ交換式の良さが大いに強調出来るが、実際に色々な条件で撮影してみると、なかなかその使い分けが難かしい。

特に冬山の撮影では、その感が深い。風景写真特に山岳写真では、量感と、高度感を、表現する為に、苦勞する事が多い。

長焦点レンズ付の大型カメラは、此の場合にその威力を発揮する。
狭い場所、溪谷の撮影等では、広角レンズを必要とする。

色々なカメラを使用してみるが、今私の使い度いと思つているカメラは、名刺判のレンズ交換の出来るもの、上下左右のあおりのきくもの、軽い事、大抵、クラウングラフィックカメラ辺りに落ち着くのではないかと思う。

山岳写真撮影で苦勞する事が多いが、特に冬山の撮影では、余程の努力が入る、内地の山では防寒の点では余り心配はいらない。オーバホールが完全のカメラだったら。

とんだ失敗をした事がある。先般京大のアナプルナ隊が発発の際、零下50度の寒さと云うので、色々研究の結果、撮影機内部の油を抜いた。撮影の結果は、高度七、〇〇〇米の稜線の、零下50度で、完全に使用出来たと云うので、すっかり安心して、その冬一月の上高地明神岳に持つて行き、先ず大正池で撮り出して、ストップ。ヒマラヤから帰つて以来、手入のしていない、その撮影機で手痛い目に会はされた。

出来るだけ各種の特徴のあるカメラを持ち度いのは山々だが、荷物の重いのは、行動に支障をきたすので、思う様には行かないものである。



「山岳映画について」

酒井菊雄

山岳映画は戦前は独逸のが大部上映されたが、其前からも其後からも先ず山岳映画と云へば、小型映画で取扱つた物が一番多いようだ。

戦後二・三興業映画や海外遠征の映画もあるが、矢張り取扱いの便と云う事を利用して、此の処小型映画の最も利用されているのが、山岳映画である云う事が出来る。

マナスル登攀や、其他私達の気の付かない部面まで十六ミリで撮影して三十五ミリに拡大した映画が上映されている処を見ると、十六ミリを相等の限度まで活用すれば、とうてい三十五ミリでは及ばぬ物が出来、十六ミリはそれ成りに相等の価値を買われても良いと思う。

山岳や風物をキヤッチするのは、簡単な小型カメラ（八ミリ、九ミリ半、十六ミリ）が最も適当に居るからこそ、今日の如きも山岳映画が隆盛をみただのである。又、この事以外にそれにはもう一つ、忘れる事の出来ないものがある。

それは山岳映画も今日の地位まで向上させた先鞭のたゆまざる努力と指導である。其先輩とは勿論、本会の会長の塚本先生であるが、関西に比較して関東が地理的条件に恵まれているとは申せ、山岳映画を今日あらしめた功績は高く評価さるべきであらねば成らない。

関西の小型映画は重に劇的要素や風物詩的の物が多いのは、先輩に優れた作家が居ればこそで、此の処山岳映画と云へば関東一手の感があるのも、早くからそうした得難い先輩を戴き、それに親しい人達に依つて上映され、又そうした映画形式も好む多くの山岳映画ファンが多いから今日の盛況に至つたのである。

そうした先輩があり、儲かりもしない映画を上映して呉れる人や面白くも無い映画を鑑みて呉れる（一種の肩）人達の事を思うと、私達作家はそう多く作品を作り、軽い気持ちで上映するのはどうも厚顔の至りと云はねば成らぬ。

日本山岳写真協会の中に映画部門がある訳であるが、同じ写真術を使うにしても映画と成ると写真部面ばかりで無しに、文学や音楽或は、美術と云つた様な物の要素が含まれているので、いっそう難かしい物と成つて終う。

写真術を利用したには違いないが、其中には自から左記の様な要素が渾然と融和されていて、一種のリズムと成つて見る人を西中に引入れねば成らない。

山岳映画の定義は難かしい。ややつこしい理窟は抜きにしても、今日は山さへ取扱つてある映画であれば、その呼び名は山岳映画と云う程、普遍化しているのだから、定義はいらない訳である。

難かしく云へば、高峰山岳で、水と雪・岩・雲・溪谷等を対照と取扱つた物から、低山や山の風物、伝説、植物、風俗、観光等まで含んだ。広い意味まで許され可きであるうか。又、記録のみを表現した物ばかりとも限らない。それは今以て私にも分らない不可解な存在である。

然しながら其不可解極まり無い所の映画に、多大の魅力を以つて製作し、又鑑賞する所を見ると、何物かがあつて私達を引つけているに相違ない。さあそれは何んであるうかそれは矢張り山と云う呼び名の地球上の盛上りが、其処にあるからであらう。

随想

私のベビーパール

月原俊二

私の写真ぐうたら記を御披露する前に少し私のカメラ経歴を記して置きたいと思う。もともと経済的に恵まれた環境に置かれていなかったし、現在も相変わらず一人前のカメラを当初より揃えることもしなかったし、所謂カメラマニアでもなかったと思っている。

十六才の時、鹿児島で初めてカメラを求めたのが手札型、乾板用。どうした動機で買ったか、初めたのが二十五年前となったので今は覚えていない。

その手札型を風呂敷に包んで腰に下げ、高圧線は怖いものという智識もなく、田植時の一般風景を高所より俯瞰撮影しようと電柱を攀ちて行き、一万五百ボルトの送電線であるとのこととは後で知ったのだが、手先が銅線に触れ、はじかれた十五米の地上に墜落、人事不省となり、田植休暇で帰省仕事中の兵隊さんに人工呼吸で蘇生させて貰った、まことに

苦い経験がある。宮崎県都城市郊外、十七才頃の出来事で、翌日の地方新聞の三面に「カメラ狂の少年電柱より墜落」「帰省兵隊さんの美拳」等とデカデカと大きく書かれたことを覚えていて。今でも右手先、右脚指に火傷の跡が暴挙を慎しめよとばかり、まざまざと残っている。

大正の末期より昭和の初め頃、五ヶ年間神戸市に住い、この頃ベス単とコダックプロニール判を持っていた。入手のいきさつは既に忘却している。勿論セコ物だった。新聞地の盛り場に住んでいて、三階の窓から不覚にもベス単カメラをアスファルトの雑踏に落とし、直ぐさま探しに降りて行ったがカメラの片影だに見つからなかった。

元町の本庄商会でD・Pを依頼していた。手札、カビネ、四切と引伸されゆく写真の味をこの頃からボツボツ面白いものだと感じるようになって来た。

昭和三年頃戸畑は帰り、友人よりベビーパールを入手した。ヘキサF3.5だった。このベビーパールを本格的に使いこなし、四切に引伸して、あちこちのコンテストに出品するようになったのは戸畑山居会を四年秋に創立し、山の写真が撮れるようになってからだったと思う。写真の会もつくり、毎月の審査に福岡の川崎満氏に来て貰ったりして、ベビー

パール作品が一日とカードケースに増していった。

戦前、堀江さんが主宰していた「月刊ライカ」後の「小型カメラ」に時折口絵等に入選しだして、もう抜き差しならぬ写真亡者に取ってかわってしまった。当時北九州で「戸畑ライカ」とあだ名を付けられていたことを覚えていて。四六時中と云って良い位ベビーパールは私の内懐に在った。当時微粒子現像液としてのチャムブリン現像液を愛用していた。

ベビーパール談話をもう少し続けたい。それ程にパールとのつながりは深かった。写友は次々と金に明かせて舶来カメラを追って転々としていたが、私はパールオンリーで脇目も振らず、地方の撮影会で入賞を続けて行っていた。

昭和十五年二月、朝日新聞主催に依る冬登山練成会が鳥取県伯耆大山で催され、藤木九三氏を筆頭に、今西錦司氏其他JAC関西支部の御歴々の指導で雪中幕営、大山登山、ツアール、スキー技術指導等が准軍隊調で三泊四日間、キビキビした行事で練り展げられた。喫煙は休憩時のみ、自由行動は一切禁ぜられ愛機を大げらに振り廻して隊の行動をスナップする等は並大抵の作業でなかった。時に二、三歩左右に列外に出て撮影ポーズす

ると藤木御大に見つかって怒声が頭から響いて来た。もっぱら盗み写しで枚数を稼ぐよりは術は無かった。その点小型のベビーパールは便利であって、ヤッケやズボンのポケットに軽くて忍ばせ易く、操作も開発を入れずに撮影すること至便であった。フィルムターはゼラチン〇号をレンズの中間に装填していたし、フードを不覚に雪面に落しても硝子を拭く手間もなく困ることはなかった。

この時の何十枚かのフィルムの中から「雪草を縫ふて」の作品は昭和十六年山溪社のアルパインカレンダーに飾らせて貰った。藤木、今西両氏が休憩時逆光線の樹木の元で一服つけていられたところのもので、この写真は昭和二十二年フイリピンから復員後、一九五一年フィラデルヒヤのサロンに出品、入選を重ねている。今一枚「吹雪く山姥」はアルペン山の写真コンテストに特選として入賞したりして死蔵していたネガが花を咲かせた思ひだった。

話は昭和十六年に舞い戻るが、大東亜戦争に先立ち、この年の十月隠密召集で当年三十六才の二等兵は欲呼の声に送られもせず、福岡の営所に入隊、十一月門司港を出帆、高雄、比島リンガエン湾敵前上陸、バタワン攻略、マニラ駐留、米軍反攻、日軍敗走、バギオ、北部ルソン、キアンガンにて武装解除迄、汗

にまみれ、戦塵に灰かぶり、カメラ表皮は脱落地金の出たマスコットのベビーパールは常に私の背のうに在り、フィルムが続く限り撮りまくった。昭和十七年暮近かく比島派遣軍報道部に転属する迄のフィルム補給は、細々乍ら愚妻が北九州の材料店や写友間を廻つて買い求め、二本三本と運送してくれて、苦しい軍隊生活の中に唯一の生きる喜びを与えてくれ、私の写慾を満足させてくれたのわ、これ一重に内助の功があったからだ、口にお出さぬが心密かに感謝している。兵隊の分際で四切に引伸して比島以外に出品する等はとうてい不可能であったが、報道部写真科員の好意でただ一度出品してみた。昭和十八年だっと思うが朝日新聞主催による「大東亜交歓写真コンテスト」にマニラ、イントロムロス（今は激戦のため灰塵に帰しスペイン二百年の歴史を物語る日本の奈良的古刹、古城の在った処）の風物を作画出品、その名のアサヒグラフにその写真が入選掲載されたが、状況も悪くなるばかりだったし賞品はとうとう未着のままとなった。

それにしても良かったことは、私より一足先に返還して無事に現存している比島のネガ三百枚程は、世の光も受けず今だもって眠っている。

しかし、そのベビーパールには全く申訳な

いし、私としてもあきらめ切れないことは、所詮、捕虜として所持可能な物品、何れ米兵に分捕られるに極つてのことだし、戦友も時計、軍刀と目ぼしい物品を煙草、罐詰の類とチェンジし尽した。榮養失調の私、御多聞にもれず、たった一罐のチキン罐詰とベビーパールと涙の訣別を敢えてせざるを得なかったのである。恐らく写し方も知らない低俗なイゴロツト族はその後あのカメラをどうしたとどろろ。憶えば空腹とは云え浅間しき極み、あと味の悪い次第である。

私のマスコットよ、今何処。敗軍の将、兵を語らず、か。

足掛七年比島常夏の異郷に兵隊ごっこをしていた私、復員しても少々活気を欠き南洋ボケと思ったりした。二十四年だったか淋しくしている私に写友がすすめてローライフレックスの旧型を買取らせた。テッサードF3.5付が味噌で三万五千円は安い買物と云ったが、すでに相当使い古され真鍮が出ていて、私としては清水の舞台から後ろ飛びに飛んだ思いで求めたつもりだったお蔭で家内用の一〇三工業ミシンは買えなくなった。

あれから八年、骨董価値万点といったそのローライフレックス一台を今日もって酷使している始末。

山にもスキー行にもゴロゴロした六×六を

欄 告 予

◆一九五六年協会展真展覧会

期 日 本月五日―十日迄六日間
場 所 銀座小西六ギャラリー
後 援 山と溪谷社、小西六写真工業
本年も右の要項により山岳写真展を開催します。当出品作品は展覧会
終了後、雑誌「岳人」の発刊百号記念事業として、各県岳聯の所在する
主要都市に巡回展覧される筈。

◆一九五六年協会展真展覧会開催（第五回）

期 日 十一月頃
場 所 未 定
例年の如く、会員の傑作映画を以て開催する予定。

第一回スポーツ芸術展覧会要項

（写真部門抜萃）

- 一、趣旨 第十七回オリムピックローマ大会及び第三回アジア競技東京大会に備え、日本スポーツ芸術の振興を期する為に広くスポーツ芸術作品を展示せんとするものである。
- 二、名称 第一回スポーツ芸術展覧会
- 三、主催 日本スポーツ芸術協会、朝日新聞社
- 四、後援 文部省
- 五、期日 昭和卅一年七月廿日―卅一日
- 六、会場 銀座松屋八階ホール
- 七、要項 スライドを除く写真（未発表のものに限る）

（一）題材

- （1）題材 (1) スポーツを中心としたもの。単なる選手等の肖像は採らないが、嘗て世界記録、日本記録を樹立した選手等の肖像は差支えない。
- （2）作品の大きさ (2) 作品は合作も差支えない。
- （3）搬入並びに搬出 (3) 四つ切以上全紙以内（台紙額縁不要）
- （4）搬入は七月十三日迄に当会事務所迄届けること。
- （5）出品申込その他細部の照会事項は当会事務所に連絡され度し。

消 息

拝啓 御申込の原稿のこと、実は御聴しい乍ら未だ四百通程の祝電、祝辞を頂いた御礼も出されないうちに始末、それに、今日から高松宮妃殿下が来られていますので、此処当分は、とても物を書く余裕がありません。あしからず。

二月十九日

猪谷六合雄

初夏の私の好きな撮影地

小合 正勝

緑と残雪の季節。初夏は写真向きで明るいのが身上でもある。今年は何処へと考えるのは楽しいもので、それが気の合った同志の山行となると特に嬉しい。私はどうも人を惹きつけるのが、仲良し山友と歩いた処は、何処も良き思い出だけ残っていて、又行きたくないので困る。故に好きな撮影地も案外そんな処に落付いてしまつて、第三者が尋ねた場合案外面白くないかも知れない。無責任の様だが先におことわりする次第である。

尾瀬……すこし流行しすぎた様だが、やっぱり初夏の水芭蕉、リューキンカの咲く尾瀬は好きだ。湿原の原より、沼の方が私は好きで、長蔵小屋の朝は気分の良い処の一つ。

吾妻山……一切終山、吾妻小富士、五色沼、家形小屋、吾妻小屋、等に配する山の温泉と色々揃う、吾妻山群は、割に東京より近く、宿泊の安くて人の親切なのが嬉しい。もっとも人ばかりでなく信夫高湯の犬が家形小屋一切終山吾妻小屋と土湯峠迄二日間もついて来て、峠でバスに乗ったら見送って呉れたの

には驚いたり喜んだり、彼氏、婦りは半日もあれば帰れるのだから、こんなのは始めてだった。

大峯山……奥利根の上牧から登る大峯山は谷川岳南面の展望に向く。撮影は少しマメに動かないと好い場所が発見出来ないが、ワイワイガヤガヤのハイカーは割に少く、池等があり静かな山行向きで、川古温泉と湯島温泉の中間あたりに出て、湯島の宿でゆっくり湯に入つて帰れる。この湯島も読書向きの温泉で、小川の合流するあたりに、サシ掛け屋根の露天風呂のある三軒中の真中の宿が、この湯があるので好きだ。料金も三軒中一番安い。わり一番山男向きに出来ている。

飯盛山……これは会津の白虎隊には縁のない信州の方、八ヶ岳、山麓小海線の清里と野辺山の中間にある方で、ハイキングコースの当選コースだそうで、八ヶ岳の展望に家族連れ向きで、牧場有つて楽しい。途中の清里附近は、初期の軽井沢の様だと云われる。お屋敷コースに最適。

洞沢……御存知の穂高の洞沢はまたスキー向きだが、残雪と新緑は良いコントラストで、横尾の谷の新緑は特に美しい。この頃の洞沢は美し過ぎてカラー向きだが、黒白はヨッポド考えてヒネッタ方がよらしい。志賀高原から白根越え……丸池―横手―万

肩を凝らして担いで行く。カラー用として賞品で稼いだコンニカ型を俱にバックにいれて行くが、寄る年波を云いたくないが二台の重量は相当肩に喰ひ込む。軽くて精巧なカメラをと何時も総求しているがそれも意のままにならない。

当年満四十九才、老眼境に入りシャープビントに相当苦心しているが、それよりも脚力の低下が一番心配である。脚で稼ぐときえ云われている、山とスキー写真家にとつて、脚は大切である。山もスキーも写真も異様な精力が要求されることは、老境に入つて益々判明して来た。しかし、私としてはたとえ六十の坂を越して白髪老人（目下半白、ロマンスグレー）となり、孫に手を引かれても止めないつもりでいる。人の手を借りずに独力で歩ける間は、歩き続ける大いなる覚悟を堅持している。私の光明、希望はつねに山の彼方の未知の大自然の恵みの中にあるからです。

座―白根―草津のコースはスキーで有名だが新緑も面白い。特に白根の火口、弓池附近は写真的題材が多く、青葉山の枯木と笹もなんとなかりそう。殺生附近の石楠花も大群落で見事である。草津の宿は全体にサービスが悪くて高いのはいやだが、其他はよろしい。帰途か往路を、軽井沢高原バス或は草軽電車に乗つてのんびり高原の緑と浅間山を、堪能すれば更に申分ない。（軽井沢―万座間にバスあり）

発端天山……西伊豆の三津浜の奥山のこの山は富士の展望台で、この山の中腹から撮ったのが、朝日の大東元さんの名作「月明の富士」で絵の様な処、絵葉書向き写真が撮れる。沼津より三津浜迄は竜宮丸で海上を、それよりハイキングで発端天山、カツラギ山と歩いて大仁温泉で一泊、この河原に日本競馬会の馬用温泉がシャワー付、コンクリート造りであるから、人間用で足りない向は係りまでどうぞ。大仁から少しバスに乗り奥雲山をやって伊東の手前の宇佐美へ出ると伊豆半島横断コースとなるが、沖田さんのカモシカでもない限り一日では少し無理でしょう。

× × ×

最近の感光材料

古谷正次郎

一九五五年から一九五六年にかけての写真界の話題はASA二〇〇級のフィルムである。

イーストマン社では、トリXの名で戦前からカット・フィルムとして製造していたが、ロールや35ミリフィルムとして市販したのは昨年からである。日本の市場にも昨年十月頃から現われ始めた。これと前後して、イルボード社(英)からはHPSと云う名称でASA四〇〇のフィルムが出、これも昨年十月頃入ってきた。この頃から日本の写真界では一体いつ頃国産でASA二〇〇のフィルムが出来るかと云う問題になって、業界誌や各写真雑誌はこのASA二〇〇級のフィルムの座談会や、特集号をやって、このフィルムに対する関心は大したものであった。しかしメーカーは黙して語らずの状態であったが、もう時の問題と見られていた。ころしも二月に小西六から突然コニパンSSSが発表になった。写真界はこの新たに生れたフィルムを拍手を

以て迎えたのであった。と云うのは、国産ではいつ出来るかと云うことが課題であったからである。そして思ったより早く出来たことに写真界は驚いたのであった。
この様な超感光度フィルムが出来る様になったのは従来の乳剤製造法に新しい方式が試みられる様になってからである。それは既に知られている金増感法と云うもので、臭化銀乳剤に極めて微量の金の塩類を加えることによって目的が達せられるもので、勿論精密なる実験結果によって製られるものである。最近はこの特殊増感法は金増感ばかりでなく、その他種々なる稀有元素が使用される様になった。

ASA二〇〇フィルムの特徴

ASA二〇〇のフィルムの特徴を記してみると、従来フィルムの感光度をあげるには、臭化銀の粒子を大きく製らねばならなかったのであるが、臭化銀の粒子を大きくすることは、現像後の粒子が荒びることになるので、写真の最大の欠陥とも云われる画像が粒子から出来ている欠点を如実に表わすことになって、少しく引伸すと荒びて不愉快な印画となるものである。この様な荒びた写真になる乳剤は解像力も悪くなるので、感光度が速くても有り難くないものである。小型カメラではこの粒状性は一層重要であるから、折角の感

光度も微粒子現像液で感光度を低下さして使用することになり、なんら役せぬ事になる。ところが新乳剤製造法では前記の増感剤によって臭化銀の粒子は、左程大きくしなくとも感光度が高くなるので、比較的微粒子で起高感光度が得られるのである。

又このフィルムの特徴の一つは現像性にある。それは現像ラステュードが広く、例えば、D76では従来のフィルムは六分一八分位が最適とされていたが、このフィルムではそれより少しのびて、九分一十二分の時に感度効果があらはれるものである。その現像の中は八分一十五分位までは立派な原板として見られるものが出来る。現像を押しても極端なハイドの原板にならないところによさがある。第一表はコニパンSSSの現像表であって、トリXと比較してみた。尚このフィルムを、新現像液であるコニドールスーパーを使用すると第二表の如く更に感光度をあげることが出来る。超感光度のフィルムの使用は夜間や人工光源が多く、露光不足であってもこの現像液を使用して現像を押すことによって驚くべき感光度を発揮することになる。このフィルムの最高感光度は、印画紙に焼き出し得る原板としては約ASA五〇〇度である。調子はUSSより若干軟調である。これはこのフィルムの性質上必要なことで、人工光源等

コニパンSSS D-76 (20°)

現像時間	8'	10'	12'	15'
A S A	140	200	250	300
ガンマー	0.4	0.5	0.57	0.65

コダックトリX D-76(20°)

現像時間	8'	10'	12'	15'
A S A	175	230	250	270
ガンマー	0.57	0.68	0.74	0.82

第一表

ではハイライイトとシヤドウの差即ち、明暗のコントラストの非常に大きなものは現像を押すと硬調になって焼出し不可能な原板となる。

よい。このフィルムのバックングは「さくら」独特のもので、スペクトルの各波長光に対して平均に吸収する様になっていて、現像液で完全に脱色してしまふ。定着から水洗に移した時に薄桃色に見えるのは乳剤に添加された感光性色素の残り、これは水洗中に消えるものである。

ASA一〇〇級と五〇級のフィルムASA二〇〇級のフィルムが出現したので従来のASA一〇〇とASA五〇級のフィルムはどうなるか？ 又常用フィルムはどのクラスかと言う問題になるが、イーストマン社ではXXを廃止したと言う。我が国ではどうなるであろうか？ 三本立の必要があるろう。

第二表

コニパンSSS コニドールスーパー (20°)

現像時間	8'	10'	12'	15'
A S A	200	280	400	600
ガンマー	0.5	0.56	0.62	0.68

コダックトリX マイクロフ ェイン (20°)

現像時間	8'	10'	12'	15'
A S A	230	270	310	330
ガンマー	0.55	0.67	0.68	0.77

microphen はヘニドンを含むイルホード社の現像液である。コニドールスーパーも同様な主薬を含むものである。

か？ 実際使用者側に立って考えても、どれにしようかと迷うにちがいない。イーストマン社ではプラスXをASA五〇からASA八〇にしているのでXXの必要はないわけであるが、それとは別に昔のパンアトミックスXを復活している。

山岳写真用フィルムとして

山岳写真用としては、超感光度は必ずしも必要でない。大抵の場合平地よりは明るい場面が多い。高感光度よりはむしろ微粒子フィルムが欲しい。解像力のよい大引伸に耐えるフィルムが向くわけである。イーストマン社のパンアトミックスフィルムはASA二五であるが極微粒子で、調子もよいと云う。戦前のものに改良を加えているらしく、微粒子で相当なグラデーションを持っていること、定着水洗乾燥などの早い点等色々新しい型と云えるであろう。この数年来フィルム感光度は上昇に上昇を続けてきたのであるが、ひるがえって考えると一方に偏し過ぎた様にも思われる。山岳等の明るい場所と、最近の大口径のレンズから見れば、ASA二〇〇級のフィルムでは最小絞で尚かつ露光過度になる可能性がある。大口径レンズは最小絞で使うことは得策でない。絞れば解像力も悪くなるし焦点の移動の問題もあるからである。大口径レンズの最鮮鋭像は、絞りF二・

映画会報告

第一回 山岳映画傑作の夕

昭和廿八年十月廿日夜 於共立講堂
フィルム提供者

酒井菊雄氏 「梅池スキー日記」
今泉正路氏 「夏の八幡平」
高橋 照氏 「新雪の西穂高」
福原健司氏 「人生はスキーに乗って」
第二回 山岳映画傑作の夕
昭和廿九年十二月二日夜 於共立講堂
フィルム提供者

塚本会長 「春雪の尾瀬」
酒井菊雄氏 「技術スキー」
高橋 照氏 「風雪の穂高」
今泉正路氏 「冬の八幡平」
内藤 実氏 「日光のスケート」
福原健司氏 「一五号台風下の槍ヶ岳」
第三回 山岳映画傑作の夕
昭和廿九年六月二日夜 於共立講堂
フィルム提供者

福原健司氏 「鹿内さんと子供達」
酒井菊雄氏 「穂高連峯」
三成善次郎氏 「黒部別山と下の廊下」
「初冬の剣岳」
高橋 照氏 「厳冬の鹿島槍東尾根」
第四回 山岳映画傑作の夕

昭和廿九年十一月廿九日夜 共立講堂
フィルム提供者

塚本会長 「春雪の谷川岳」
酒井菊雄氏 「一九五四年国体スキー」
中野峻陽氏 「秋の黒部溪谷」
福原健司氏 「スキーの基礎」
三成善次郎氏 「五月の甲斐駒」
以上四回の十六ミリ映画会は、山と溪谷社
小西六写真工業KK、明治生命保険KK、東
京山岳連盟の後援のもとに開催、毎回非常な
成会であった。

山岳写真展報告

廿八年十二月十五日―十九日 於三越本店
廿九年七月二日―七日 於銀座松屋
廿九年十二月十三日―廿二日 於銀座松屋
廿九年七月一日―六日 於小西六ギャラリ

委員会報告

昭和卅年一月十日 於富士ビル
会計報告の検査承認、映画会に於ける謝礼
の件決定、今年は春秋二回映画会開催決定。
昭和卅年一月廿八日 於塚本事務所
会長、副会長、沖田に依って委員の詮衡会
議を開く、船越好文、内田耕作、南部英夫、
高橋照、鈴木忠夫、川崎吉蔵、沖田虎吉を選
出内常任委員川崎吉蔵、沖田虎吉とし、会計
委員を兼ねる事に決定した。

立山撮影会

沖田 虎吉記

昭和卅年四月廿九日より五月五日迄春スキ
ーを兼ねた撮影行を立山にて行う。春スキー
と、撮影と云えば立山を置いて先ずないだろ
う。

今年はケーブルカーも完成して美女平への
登行もなくなり、其の完成を祝して立山にて
卅年度第一回の撮影会を行う。地元の中島峻
陽氏の斡旋で富山電鉄の後援の元、一行廿八
日の急行北陸号で出発、富山駅二十九日早朝
到着、中野氏を始め富山電鉄、富山スキー連
盟会長市川氏のお迎えを受け新設仮立山駅に
至る。目下ケーブル始発迄の延長工事中であ
った。

藤橋で新設のケーブル特別運転を受けて撮
影をし乍ら美女平より追分小屋に一泊する。
廿日晴れ早朝天狗小屋へ向う。快晴に遅々
として足は進まず、屋に小屋到着、後は自由
行動、雄山に行く者、大日岳乗越へ行く者と
それぞれ思ひに夕方迄撮影。又暗くなる迄ス
キーに興ずる者あり、天狗小屋泊。

一日未明より戸をたたき、風雪しきり。此
れ迄黒土に至る所に露出して居ったのが一面
白銀に覆われ、降雪中一同いさんで地獄谷温

撮影会報告

蔵王 合宿

中野 慶一記

卅年度初の親睦撮影会なる合宿行事が蔵王
にて行われる事になり、その参加者総勢十数
名に到す。旬日前からの異常高温に頭を痛め
乍ら、三月四日 青森行十九時卅五分の夜行
列車の客となる。山形より蔵王温泉へ先ず若
松屋に腰をすえ、風呂や飯やで出発は九時。
高鳥コースを登ってドッコ沼畔の山の家に着
く。先ずは鳥カブトゲレンデに推参しスキー
を満喫す。三日前の雨と気温低下で作られた
雪質は滑降過剰になる程のアイスバーン、地
蔵岳は相変らずガスに覆れ、その風貌すら見
せない。午後は早々にゲレンデを引上げ、山
の家三階の部屋へ主曜なる為か、真に満員の
盛況である。

流馬乱舞、つきるともなく続く光景に、誰
云うとなく取りいだしたカメラをそしてメラ
ドッコ沼を眼下に霧氷の林を通しての光景と
云えばさぞやと思いの外、スチールには、ち
と頂けぬモチーフであるが、横着を極んだ

八かF四位の処にあるから高感光度フィルム
使用の為に絞りを小さくすることは好まし
いことではない。こんな場合はASA二五級
のフィルムが却てよいわけである。赤外フイ
ルムも山岳写真用の寵児である。赤外フイ
ルムの特徴として、彫明な描写と魅力的な感色
性が風景写真を一層引き立たせている。若し
従来の極端な感色性をきらうなら、赤色フ
イルターの代りに黄色の一号―三号位を使い
分けすることがよい。感光度は戦前の約三倍
でF八で150秒位のシャッターが切れる。
カラーフィルム
カラーフィルムも日本に於ても段々内式型
に移りつつあるのは事実である。現在35ミリ
映画用は全部内式型になつてゐる。従来の反
転映画用でASA八二〇度のものが、ASA
A三二度と云う高感光度のものになつてき
た。又イーストマン社で小型のものは全部外
式型であったものを最近35ミリ判の内式型
も発売した。これはこれまで問題になつてい
た内式型の粒状性が解決されたと思ふべきだ
ろう。既にライカ判が発売された以上小型映
画フィルムも内式化される段階に來てゐるの
ではなからうか。
アンスコ社では、アンスコクロームの新型
16ミリ反転フィルムをASA三二度で粒状性
もよいと発表している。

泉小屋に向う。

屋も過ぎ午後三時頃より雲も去り雪も止み快晴となる、一同カメラを手に手に別山へ奥大日岳へと活躍する。二日間のゆううつも吹飛んで陽が西にする迄一同なかなか帰らなかつた。

二日今日は晴れ一同別山に登る山頂は強風にレンズを覆う風雪に悩まされ乍ら活躍する、午後頂上にてスキーに興ず。

三日雲の多くなった大日乗越に登る、待期数時間するも一向に颯岳、大日岳共に峯頭現はさず、長時間の待期も無なく引返す。その頃より小雨状となり降ったり止んだりだった。小屋に戻って野天風呂に入浴五日間の汗を流す。

四日今日は一同揃って雄山に向ひ室堂にリックを置いて一ノ越で二班に分れ、一班は右の突起へ、一班は雄山へ登る。此の時も遠望雲多く撮影思うに至らず一ノ越へ引返し、一気に室堂へ入り込んで置いたリックを取って下山に向う。天狗の平はクラスト甚しく重い荷物に、足はがくがくになる。天狗小屋からは雪の状態も良くなりブナ坂近く迄滑って、今日は藤橋で楽しい里の味を味わひ酒杯を上げて泊す。

五日思ひ出も深く藤橋を後にして去り難く駅で途中下車名残の立山の遠望を盛んに

撮影する。屋近く富山に出て市内見物をして中野氏宅を訪問して分かれ、駅では市川氏の御配慮に依り満員列車にも拘らず座を取る事が出来て一週間の旅も無事帰京した。沖田記参加者 高須、新城、白井、中野、中村、長谷川、山本

八甲田スキー撮影行

風見武秀記

樹氷と粉雪の八甲田山へ、久しく待望の三月上旬に出掛ける事が出来た。

今年の樹氷は近年に無く素晴らしいと言葉通り吹雪の続いた処の八甲田は本当に良かった。

三月七日 夜行皆より二日先行する。

青森から横内村迄バス、直に雪上車と連絡も良く八日も午過ぎには雪深き八甲田中腹の酸ヶ湯温泉に着いた。

スキー映画撮影で先着の福原君一行が待つて居た。十日も吹雪にて雪は素晴らしい。

九日 午前スキー 午後時々撮影

十日 午前晴、午後曇雪上車が一寸遅くれて午後一行来る、急ににぎやかになる。

夕方迄スキー練習、夜は天気祭りで大いに盛大……

笹森さんから連絡で急用にて参加出来ず残念

念と

十二日 強風、晴

午前中は風強く雲が流れて八甲田連峰がすっかり見えて来る午後は晴れて快的な撮影行皆大いに撮った。

美しい木花と樹氷の世界、八甲田大岳の北面は広大で樹氷も見事。

午後は硫黄岳コースに合流して日暮迄三浦さんに滑って頂いてスキー写真を撮影、帰途岩木山の落田の美しさに感激する。

十三日 朝晴 天候悪化 雪

午前中雪の中を滑り廻る、午後小田、中村参加

十四日 雪

今日は下山と決め、田茂泡コースを降る事にする吹雪の中で頂上は視界零だったが茅の茶屋迄の滑降は実に素晴しかった。振り返る八甲田山は雲の中だったがいつも乍ら、酸ヶ湯温泉の人々の温い歓待に皆心うたれ、五月の春スキーに再び来る様話し合った。

大変御世話になった酸ヶ湯温泉の人々、三浦さんに厚く御礼申し上げます。

参加者 三浦、福原、三木、風見、南部、横田、石場、鈴木(忠)、猪山、長谷川、小田、中村外2名

月例集会報告

昭和廿八年四月十七日於銀座グリル
自己紹介、蔵王撮影会報告風見氏、日米合同写真展へ出品作の説明塚本会長等有り。南部氏特選に依るビール一打の寄附有り。

出席者十七名

昭和廿八年五月十四日於三笠会館
自己紹介夏の八幡平撮影会の提案有るも決定に至らず。日米写真展出品の様子の説明風見氏。映画会の提案有りて決定す。委員小合、風見、金沢、石場、沖田の五名に決定す。

出席者十二名来客二名

昭和廿八年六月十一日於三笠会館
映画会本決りとなり実行委員を決定、小合、風見、川崎、北村、金沢、石場、沖田

出席者十三名

昭和廿八年七月九日於三笠会館
映画会準備報告終って今泉氏「夏の八幡平」映画の御賞、小合氏の近作のスライド観賞

出席者十六名

昭和廿八年八月十三日於大宮市見沼
此の日は特に約縁懇親会として盛大に終始歓談で会をとじた。

出席者十三名
昭和廿八年九月十日於三笠会館

映画会の詳細打合せ、会報並に名簿発行の件風見氏出版記念会開催の件、等の議題有り終って、福原氏の「人生はスキーに乗って」を観賞し散会。

出席者十七名

昭和廿八年十月於三笠会館
田口氏外遊日記スライドを観賞す。

出席者十二名

昭和廿八年十一月十二日於三笠会館
マナスル登攀の記録映画観賞と講演、三成氏の処女作「秋の尾瀬沼」上映する。

出席者十九名

昭和廿八年十二月十日於三笠会館
沖田事故の為め記録無し。

出席者十二名

昭和廿九年一月集会是休会する。
昭和廿九年二月九日於三笠会館
映画会の報告及、三越に於ける展覧会の報告沖田。草津スキー行を小合氏より提案、今泉氏の映画「十和田湖」を観賞して終る。

出席者十四名

昭和廿九年三月十一日於三笠会館
夏の展覧会開催の件風見氏より提案此れは山溪廿五周年記念事業中へ組入る事に決定する。風見氏の近作スライド観賞する。

出席者十名

昭和廿九年四月八日 於三笠会館
今夏銀座松屋に於て山岳画協会と合同展覧会は決定したと報告風見氏。川崎氏より山溪廿

五周年記念事業中地方巡回写真展の申入れ有り、承諾する。

出席者十八名

昭和廿九年五月十三日於三笠会館
松屋に於ける展覧会の打合せ有って、アンナブルの映画と今泉氏の「冬の八幡平」の映画観賞する。

出席者廿二名内客三名

昭和廿九年六月十日於三笠会館
七月の展覧会の打合せ、持ち寄りのスライド観賞する。

出席者十七名

昭和廿九年七月七日於三笠会館
今回は展覧会出品作品取片けて引続きの集会有ったので展覧会の報告を沖田氏して後は雑談で終る。

出席者廿名

昭和廿九年八月十二日於直吉そば店
来る十二月二日に共立講堂に第二回映画会開催の報告沖田。大阪市にて山岳写真展開催の件風見氏より報告。高橋照氏の早春の「八海山」の映画を観賞して終る。出席者十四名

出席者十四名

昭和廿九年九月九日於直吉そば店
十二月映画会の準備相談、冬の写真展は風見氏へ会場交渉を一任する。出席者十八名
昭和廿九年十月十四日於直吉そば店
映画会の手で終始する。松屋に於ける展覧会は十二月十三日・二十日と決定報告。

出席者十三名

昭和廿九年十一月九日於三笠会館
映画会当日の打合せ、十二月展覧会の出品作

品廿日迄小型引延して提出と決定。

出席者十八名

昭和廿九年十二月九日於三笠会館
忘年会を兼ねた集会とする。新規会則の骨子を作り、船越氏議長となつて此れを審議して決定する。展覧会出品作品も選出決定する。

廿九年度中集會へ参加者

一回が五名、二回が九名、三回が一名、四回が二名、五回が五名、六回が二名、七回が二名八回が五名、九回が一名、十回が三名、十一回が三名となり延人員百九十七名、一回の平均参加人員は十六、四名となり不参加者六名です。

昭和廿年一月十九日於三笠会館

会長から新年の挨拶、会計報告を沖田より説明有り。昨年十二月の委員選挙に不備な点があり此れを御破算として改めて、会長塚本氏副会長小合氏、風見氏に指名、委員は会長、副会長に一任となった。

会長より本年から団体の中へ芸術部門が出来て其の中へ写真も加わる事になると報告有り盛會裡に終った。

昭和廿二年十月十日於三笠会館

本年の委員の決定を沖田より発表、各委員より挨拶有り、撮影会を蔵王山に開催と決定する。現地交渉は福原氏之れに当る。

出席者十七名

昭和廿年三月十日於三笠会館

六月二日の映画会のフィルム決定を発表、寒さとカメラの操作に就いて高橋照氏の経験談有り。ナクサ出品特選福原健司氏、入賞酒井菊雄氏共に試写会に於て協会より贈花に答礼有り。六月映画会の委員を小合、内田、鈴木新城、川崎、沖田、と決定する。

参加者廿三名

昭和廿年四月十四日於三笠会館

航空写真の撮影に就いて八木治氏、団体談話小合、風見氏より、又光学講話を房泉儀幸氏より講話有る。六月二日の映画会の切符を会員へ委託す、新入会員五名有り。

参加者廿二名

昭和廿年五月十二日於三笠会館

六月二日映画会当日の各係の割当を決める。今日は作品の持ち寄が多かった。

高橋照氏作「鹿島槍東尾根」の上映有解散

参加者廿七名

昭和廿年六月九日於直吉そば店

展覧会作品持寄り、小合、風見、内田、八木氏より選出す。第二回を近日中にやる事にして解散。

参加者廿名

昭和廿年七月十四日於三笠会館

展覧会出品作品に就いて注意事項有り。集会の通知を受けたなら不参加の場合は必ず連絡する等注意有りて解散。

昭和廿年八月の集会は休会

昭和廿年九月八日於三笠会館

議題無く夏山の思い出等語って散会。

参加者廿三名

昭和廿年十月十五日於三笠会館

会員鈴木忠夫氏、中村雅晴氏の結婚祝を呈すアミコ社より山居写真集出版の手紙披露有り全員の賛成有って、塚本会長、小合氏風見氏沖田に一任となる。此れは其の後、期日無く実行不能となった。十一月映画の切符を会員に委託する。「春雪谷川居」塚本氏作を上映し散会。

参加者廿一名

昭和廿年十一月十日於三笠会館

映画会当日の各係を決定発表する。酒井氏の「一九五四年団体スキー」中野峻陽氏の「秋の黒部溪谷」三成氏の「五月の甲斐駒」を試写観賞する。

参加者廿五名

昭和廿年十二月八日直吉そば店

映画会の報告沖田有り、来年映画会は一回と決まる。委員選出を会長、副会長、常任委員に一任と決まる、映画会慰労を兼ねた忘年会で飲後の後散会する。

参加者廿一名

廿九年度中集會へ参加者

一回が五名、二回が二名、三回が六名、四回が六名、五回が四名、六回が十名、七回が六名、八回が四名、九回が四名、十回が二名、十一回が三名となり延人員三百名、一回の平均

均参加人員廿七名強となり不参加者三名です。

沖田 虎 吉記

出て湯あれこれ

小合 正勝

「出て湯」と云うとコンコンと湧いている山の湯を想うが「温泉」と来ると熱海、伊東か、せいぜい上ノ山、浅間あたりが頭に浮ぶ、誠に變なものだ。

僕が始めて山の湯に出会ったのは、中学生の頃、たしか四年生だった秋の事、同級生だけ八人程で出掛けた。湯元から金鉱のあった峠を越えて川俣温泉へ出て、やっこの思いでたどり着いた八丁の湯は小屋掛けだけの露天風呂で、それだけしみじみした楽しさにあふれて居た。昭和五、六年の頃だが、帰りは長い川ぞいの道を、牛車に乗せてもらったり歩いたり、学校へ泊めてもらったりして、四日目位でやっと川俣温泉へ出た時は、やれやれと心から思ったものだ。

それ以前にも学校の遠足では箱根の姥子や日光の湯元には泊ったが、小人数で、山の湯に入ったのはこれが始めてである。

そもそもこれが病み付きと申しましよう

か、すっかり温泉好きになってしまつて、先日ある座談会で数えて見たら、現在までに一泊以上した事のある温泉だけでも百十数ヶ所になるとは我々が驚いたものだ。

温泉に入るだけの目的で旅をした事は案外少く、戦時中に北陸から関西方面に廻ったのと、東北地方へ一度こけしを尋ねて相棒の鈴鹿君と二人で一週間位の旅を、これも戦時中の昭和十六年頃にやったのと二度位のもので、あとは殆んど山行の往復に、ついでと称して立寄った処だ。

その中で何処が一番悪かったかと尋ねられるとちよつと返事に困まる。七五〇位は良い想い出ばかりで、いやな事は忘れる事にしてゐるから残りの二五〇が思い出せない訳だ。良い方なら、タントあるから、ポツポツ拾って御紹介しよう。

東北地方

大鰐……石場大人のふるさと近く、よき温泉地の由、鍋？の美しいがあるそうなので、小生残念乍ら見参つかまつらず悪からず。

夜半の湯槽でのんびり唄った大鰐小唄は良かった。

花巻……平野の温泉で、桜の美しい夜に一泊しただけ。姉妹のきれいな芸者がモデルに

なつて昨日は撮影会があった。同行風見先生。

羽越赤倉……河に面した三階建のすぐ大きな宿の殆んど全部が自炊で、食事は盛大に賑やかである。夜は混浴で、岩のある河原を仕切った様な大きな浴場で、ノド自慢大会があり、いただける。

上ノ山……蔵王の往復に立寄つて、どっちが目的だかわからなかった人もあるとか、小生等はそれ程では御座んせん。コタツと温泉とがつながって感じられる温泉でもある。

赤湯……平野の温泉で、一度尋ねたいと、戦前から考えていて、やっと昨年思ひがとどいたが、それ程の処ではない。湯豆腐を注文したら馬も喰わない程山盛りに出て、二百円也にはあきれた。

五色……両足ネンザの想い出と、番頭の背中に後向きにしばられて、板谷駅迄の寒かった事が頭に残る。朝食に、ナベごと出されたミソ汁のうまかった事がなにより。

横向……秋にここので唄った舞タケの味は天の珍味、三杯酢になっていたのでアツビと間違えた。

東山……八月の盆踊りは二度行ったが、今年も行きたい。太鼓の音に眠れないのも良きもの也。

関東甲信越地区

吉奈……修善寺の奥の静かな温泉で、幾つもある浴槽は面白く、猪の山家焼は珍味。冬の味である。蔵王高湯のジンギスカン焼と好一對。旅館が、隣りの宿と入り組んでいて、廊下をうっかり歩いていると、隣家に入ってしまったって驚く。ここからダルマ山に登ったが終日一人の登山客にも会わず静かで良ろしい。

大仁……釜淵大山ハイキングで泊ったが、アユの狩野川に近いので、料理は上等。河原で焼いて喰べるのは風流だ。馬の入る温泉が全国一の設備(?)を持っていて、馬並の自信のある向はどうぞ。但し本物におことわりをしないと飛んだ目に合ふ事がある。

浅間……北アルプスの帰りに、キット立寄ったこの温泉は懐しい。ガイドもこの湯に一滴さしてくれる旦那があると喜んだものだが、現今では二分の日当が損だからガイドも来ないし、客もそんなのは少い。戦後少しの間、影もひそめた女衆も直頃は盛大に出て来たとか？

中房……バスで来て、サアッと登ってしまふんだから中房温泉に入る登山者は少く、もっぱら、アベック用となったらしいが夏、以外に行くと昔の様に静かで楽しい。

中ノ湯……ぬるっとする湯でヒックリ返った事が印象に残っている。ト伝の湯とか云うのがあったっけ。残雪の頃、重いザックを肩に、たどり着く出で湯の宿はなつかしい。夏にバスの窓から眺めると同一宿とは思えない親しさがある。

湯島(利根西入り)……猿ヶ京の奥の湯島は静かで読書向きだ。こんな処で一日ぼんやりしているのも都会ノイローゼ組にはたしかに良い。カメラは持参しない方が良い。撮る物も、撮られる者も居ないから。宿は三軒。他はなんにも無い。近時、ダムの際になるので少し上に引越すとか、本年が最後の模様



◇ 編集 後 記

二月の集会以懸案の会報を発行する事になったのは、非常に嬉しい事ではあったが、その編集が自分の仕事になったのは困った。初めての仕事なので、どうなる事かと案じたが、幸に編集係になっていた、石場、新城、中野、長谷川の諸氏と、いろいろ会の仕事で御多忙な沖田氏にも加わっていただき、その御骨折りでどうか第一号が出来上った。

編集の不手際で寄稿者にも、読まれる方々にも、御不満は多い事と申します。御意見をどしどし御寄せになってより良い会報になる様に御協力を御願います。

今後、年二回発行の予定で努力しています。が、原稿が仲々思う様に集らないので、次回からは、進んで御寄稿下さる様御願います。

(南部記)

会 報 創刊号

日本山岳写真真協会会報

昭和卅一年五月十日発行

編集者 南部 英夫

発行者 沖田 虎吉

事務所

東京都中央区銀座西四ノ一 山映商会内

日本山岳写真真協会

電話(56)三〇七三